

石山に生きる生き物たち

2006/09/08 の Blog

[石山に生きる生き物たち \(1\) キタキツネ、タヌキ、エゾリス篇](#)



キタキツネ

◆北海道にしか生息しないキツネの亜種キタキツネ。石山では人なつこく姿を現わすことはない。めったに姿を見せなくとも、よく声を上げてないので、その存在がわかる。



タヌキ(狸)

◆石山にタヌキが生息しているとは思わなかった。タヌキは本来、夜行性の動物であるが、真昼間、私が散策路を歩いていることを知らずにノコノコと姿を現わし、私の姿を見て驚いた様子であった。その後、石山の散策路ではない場所を歩いてみると、木の下にいるネズミかなにかを捕るために掘り返した後を発見。足跡(フィールド・サイン)を残していたので確認することができた。



タヌキの子

◆近寄ってもじっとして動かない。まだ人間を恐がっていない子どもタヌキと遭遇。



シマヘビ

◆石山ではこれまでも何度となくヘビに出会っているが、写真に撮れたのはシマヘビ、しかもまだ大人になっていない亜成蛇である。



大好物のオニグルミを食べるエゾリス

◆北海道で見られるリスの仲間には、エゾリス、エゾマリス、エゾモモンガの3種がいる。石山で私が確認できたのは、エゾリスとエゾシマリスである。エゾリスとエゾシマリスは明るい日中に活動するのに対し、エゾモモンガは暗くなってから活動する。また、エゾリスとエゾモモンガはおもに樹上で活動するが、エゾシマリスはおもに地上で活動する。冬眠するのはエゾシマリスだけである。同じリス科でも生活の仕方に違いがあるようだ。

2006/10/10 の Blog

石山の生き物たち (2) 鳥 篇



エゾライチョウ(♂)

◆今回、はじめて遭遇したエゾライチョウのオス(♂)。ずんぐりとした体形で喉が黒く、顔から首にかけて白く、目の上は赤くなっている。ちなみに、エゾライチョウのメス(♀)は全体が茶色っぽいのだそうだ。

◆エゾライチョウは季節的な移動を行わない留鳥である。現在、道内のエゾライチョウの生息数は極端に減少しているという。つまり、姿を見ることが難しくなっている野鳥なのだ。石山で観察できるとは嬉しい限りである。



アオジ(♂)

◆6月中旬に撮影したものである。腹部の鮮やかな黄色が特徴的である森の中でチツ、チツ、と鳴く声がすれば、それはアオジである。



マガモ

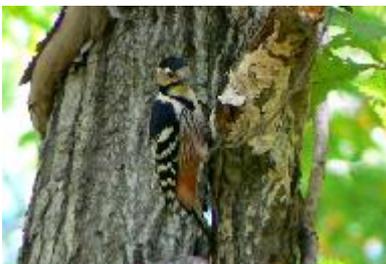
◆石山の麓にある農耕池のマガモ。子育ても終わったようだ。



仲睦まじいマガモ

◆石山を散策していると、年輩の夫婦が仲睦まじく歩いているのをよく見かける。うらやましいな、といつも思っていた。私の妻は海を見ることが好きで、海を見ていると何時間でも見ている。ところが私はそれができない。反対に山に行くといつまでも山にいたい性分である。私は山派、妻は海派と思っていた。ところが最近、異変が…。妻が私の石山散策についてくるようになった。秋になって、一緒に木の実を採ったりしたのが気に入ったのか、山の楽しさが分かってきたようだ。

◆「夫婦で同じ仕事をし、同じ楽しみを持てるあなたがたはとても幸せだ」と私の母が言っていたと妻から聞かされた。



エゾオオアカゲラの雌(♀)

◆写真は、エゾオオアカゲラの♀。実にきれいな鳥である。雄(♂)は頭に赤い模様がある。アカゲラはキツツキの仲間。それゆえ、樹木を突く音でその存在を知ることができる。アカゲラとの違いは、特に雌の場合、胸から腹にかけて黒い斑点が密であることらしい。

◆鳥を撮影するのはとても忍耐がいる。樹木や花のようにじっとしていることなく、たえず動き回っている。そのうち鳥を撮影することにチャレンジしたい。

2007/04/25 の Blog

石山の生き物たち (3) エゾシマリス エゾライチョウ



エゾシマリス

◆春を呼ぶものたちは必ずしも樹木や山野草たちだけではない。冬の間、冬眠していたものたちがすでに活動をはじめている。シマリスたちも緑の茂った夏や秋ではなかなか見つけることが難しいが、まだ枯葉が敷き詰められた春には、枯枝や枯葉の上を歩く彼らの足音を聞くことができる。幸いかな、その音の聞こえるところに目をやると、「いた!!」すかさずシッターを切った。

◆エゾシマリスは北海道にしか生息しない生き物たちである。その道の専門家によれば、彼らは早朝と夕方、ほぼ決まった時間に自分の住処を出入りするらしい。しかし、私が見たシマリスは午後2時をまだまわったばかりであった。

◆緑に覆われる季節では見ることがなかなか難しい。尻尾が体と同じくらい長い。



エゾライチョウ①

◆昨年の夏の終わり頃にも、石山でエゾライチョウの雄に出会った。しかし、今回はエゾライチョウの雌に出会った。人の気配を恐れる様子もなく、ケヤマハンノキの冬芽を食べていた。エゾライチョウは留鳥であるが、近年、その数が減っていると言われている。



エゾライチョウ②



エゾライチョウ③



樹木を映すミズキの雫

◆雨も降っていないのに、幹や枝が濡れていたりすることがある。それはミズキである。名前のとおり、水を吸い上げる力が強く、枝の折れた部分や幹の傷ついたところから水がしみ出ている。これも春の風物詩のひとつ。自らの体からしみ出た一滴の雫(しずく)の中に、石山の春を待つ樹木を映し出している。幼子イエスの中に神の救いを見た老人シメオンのように。

2007/04/26 の Blog

[石山の生き物たち \(4\) クジャクチョウ ヒオドシチョウ](#)



クジャクチョウ

◆クジャクチョウはタテハチョウ科の仲間、その中でも越冬するチョウである。雪解けとともに飛び回っている。彼らもまた春を呼ぶものたちである。とても特徴的なデザインである。



ヒオドシチョウ①

◆ヒオドシチョウもクジャクチョウと同じく越冬するチョウである。いったいかれらは冬の間、どこに潜んでいるのだろうか。飛ぶこともできず、ただじっと春を待っている。それに比べると私たち人間は待つことをしない。いや、できない弱

さがある。自然の流れに身を任す生きものたちは、自分の時があることを知っていて、それを信じてただじっと待つ。これは自然の真の姿なのだ。彼らから学ぶことは多い。

◆聖書の中に「天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある」とある。そして「神のなさることとは、すべて時にかなって美しい」とも。すべてのものに神の時があるならば、この私も神の時に身をゆだねたい。



ヒオドシチョウ②

◆このチョウはヤナギ類やハルニレでよく見られるという。昨年春にもこのチョウに出会った。写真では、後ろの羽が傷んでかかっているように見える。



再び出会ったエゾシマリス①



再び出会ったエゾシマリス②

2007/06/18 の Blog

[石山の生き物たち \(5\) 子育て篇 \(アカゲラ\)](#)

[



アカゲラの雄ヒナ①

◆木の巣穴の中でひっきりなしに餌を求めて泣いているアカゲラのヒナ。ときおり、待ちきれなくて巣穴から顔を出してしまうが、すぐに顔を引っ込めてしまう。その一瞬を狙った。目を見るとまだ幼い顔をしている。巣立ちはいつになるのか、今年は観察してみようと思う。

※追伸・・・このヒナは6月29日に巣立ちました。



アカゲラの雌ヒナ②

◆このヒナは頭が赤くないので雌のヒナ。鳴き声も聞く限り、巣穴には2羽いるようだ。



餌を巣穴に運ぶアカゲラの父①

◆昨日は「父の日」。といってもパツとしない記念日。アカゲラのお父さんは目下、子育て奮闘中である。5～10分間隔くらいに餌を巣穴に運んでくる。観察していると、巣穴まで来るのに、周囲にある木々の間をなんとか行き来してから、注意深く巣穴に近づく。そして餌をヒナに与えると一瞬にして巣穴を離れる。敵に巣穴を見破られないためだ。



アカゲラの雄親②

◆捕ってきた餌をヒナにしっかりと与えている。「さあ、口を開けて。あ～ん」そんな流暢な世界ではなく、一瞬の出来事だった。



アカゲラの雌親もがんばっています

◆子育ては雄親ばかりでなく、雌親もやっているが、餌となる虫を運んでくるのは雄親の方が圧倒的に多かった。時間としては一時間半ほどの間であったが、だいたい雌親は雄親に比べての1/4ほどであった。アカゲラの子育ては、おとうさんが頑張っているんですね。

◆頭が赤くないのが雌である。

2007/06/20 の Blog

石山の生き物たち (6) エゾタヌキ



エゾタヌキ①

◆石山の樹木はみな一斉に葉を広げたため、林内は薄暗くなり、6月下旬の山野草はその影を潜めている。

◆そんななか、昨年に引き続いてエゾタヌキに遭遇。今回は二匹のタヌキに出会った。兄弟かもしれない。向こうも驚いている。石山の舗装された散策路を横切ろうとしている。最近、空知地区にアライグマが増えていると言われるが、尻尾を見る限り、これはタヌキである。まだ子どものような感じだ。それほど太ってもいない。石山にタヌキがいること事体、私にはとても嬉しいのだ。それは石山の自然の豊かさを物語っているからである。滅多に目に触れない彼らとの出会いに、今日は得した気分だった。



エゾタヌキ②



エゾタヌキ③

◆石山の舗装された散策路をゆっくりと横切る姿がなんともかわいいです。



エゾタヌキ④

◆こうした突然の出会い、予期せぬ出会いは、こちらの方が緊張してカメラがブレてしまう。ブレ防止のカメラなのに…。



エゾタヌキ⑤

◆もう一匹のタヌキは私の存在に気づかずに歩いている。

2008/06/04 の Blog

[石山の生き物たち\(7\) またまたアカゲラの子育て](#)



餌を運ぶアカゲラ(雄)

◆森の中を歩くときには、目と耳を働かせながら、ゆっくりと歩く。すると、いろいろな発見をすることが多い。いつもの散策路を歩きながら、複数のヒナの鳴き声が聞こえてきた。その声と、キョツ、キョツと鳴くアカゲラの鳴き声とする。辺りを見回すと、枯木に巣穴が見えた。「ひょっとして」。ヒナの姿は見えないが、確かにヒナの鳴き声とする。親鳥は私を警戒して、枯れ木の周辺の木々を転々と移動して、なかなか巣穴には近づかない。しかし、必ず、この巣穴に餌を運んでくるはず。その時を、カメラを構えながらじっと待った。すると…



餌を運ぶアカゲラ②

◆背中に逆さ八字の白い斑点が美しい。ちなみに、アカゲラは「赤啄木鳥」と書くらしい。明治の歌人(詩人)、石川啄木と同じ字である。



餌を運ぶアカゲラ③

◆おやおや巣穴に・・・まだヒナが大きくなっていないようだ。



餌を運ぶアカゲラ④

◆昨年も別な枯木にアカゲラの巣を発見した。初めてということもあって、ビデオカメラまで設置しながら興奮して撮影した。ヒナもだいぶ大きくなっていて、ひっきりなしに鳴き続けていたのを思い出す。そして巣穴から顔を出したりしていたが、今年は親鳥が巣穴に入っていた。餌を与えた後で、巣穴にあった糞などを外に放り出す行為も見られた。

◆巣穴から顔を出しているのは親鳥。



石山のアカゲラ

◆正確な数を知る由もないが、石山にはアカゲラ(正しくは、エゾアカゲラ)が多く生息しているように感じられる。留鳥であるため、一年中を通して出会うことができる。石山の森は巣作りする落葉樹の枯木が多くあるため、アカゲラにとっては繁殖しやすい環境にあるようだ。とても美しいこの鳥をもっと詳しく観察してみたいと、今回、思わされた。

◆写真は(巣穴とは別の場所)、三羽の雄同士が、木に止まってじっと動かずに、それぞれが大きな声を出し、誇示し合っているのを見た。後で調べてみると、繁殖期の縄張り争いだったことを知った。

2006/06/06 の Blog

[石山に生きる昆虫たち \(1\) 蜜を求めて飛びかう蝶たち](#)



菜の花篇①

◆石山の一角に、どこから飛んできたのかわからないが菜の花が群生するところがある。そこで出会った蝶。カラスアゲハだと思われる。



菜の花篇②

◆菜の花の蜜を吸うチョウ。この蝶の名前はサカハチチョウ



タンポポ篇①

◆石山の頂上、展望台のある一角は今、タンポポの群れである。この蝶は、ミヤマカラスアゲハ。コバルトブルーの美しい蝶です。



タンポポ篇②

蝶の中でも最も美しいと言われるミヤマカラスアゲハ。



タンポポ篇③

◆チョウはタンポポの群れの中を、実に気まぐれに飛び交う。

2006/06/16 の Blog

石山に生きる昆虫たち (2)



セミの抜け殻

◆日本には 30 余種類のセミがいるといわれている。セミに関心のある人によれば、脱皮殻を見るだけで、それがなんのセミの脱皮殻なのか分かるという。調べてみると、どうやらこの写真の主は**エゾハルゼミ**らしい。



幼いエゾハルゼミ

◆写真は羽化したばかりのセミで、まだ鳴くことができない。体の色もまた全体的にはっきりしない。



とても美しいエゾハルゼミ

◆石山は今、**エゾハルゼミ**たちの鳴き声であふれかえっている。連鎖反应的に一齐に鳴き始めると、探そうとしてもどこにセミがいるのかわからないほどである。このセミの鳴き声が、あるときにはカエルが鳴いているようにも聞こえるのである。

◆**エゾハルゼミ**、私にはこのセミがとても美しく感じられる。配色といい、形といい、神の創造による完璧なまでのデザインである。自然における神のデザインは人間にはとてもおよばないほど神秘的である。

◆私たちもひとりひとり神の創造によるものである。ひとたび創造にかかわった者ならわかるが、自分の作った作品はとても自分にとってかわいいものである。神とて然り。ひとりひとりが神にとってかけがえのない存在なのである。しかも、生きているのは決して偶然ではない。創造者である神の意図が必ず存在する。



いつも嫌われもののカメムシ

◆カメムシの仲間は全国に分布し、植物を枯らしたり、不快な臭いを出すため、害虫に分類される嫌われものである。その強烈な臭いは外敵から身を守るためのものと言われているが、カメムシ自身にとっても有毒で、密閉容器に閉じこめると、ほどなく死んでしまうそうである。

◆この写真の主は、調べてみると**プチヒゲカメムシ**らしい。



タンポポの花粉まみれのアブ

◆**アブ**と**ハチ**の決定的な違いは、ハチ類が前羽と後羽があるのに対して、アブ類は前羽しかないことである。彼らも植物の繁殖を担っている大切な生き物。彼らの存在がなければ植物も子孫をつくることはできないのである。

2006/09/13 の Blog

[飛行の名手 トンボ 石山の昆虫たち \(3\)](#)



マイコアカネ(♀)

◆今、石山ではトンボたちで賑わっている。「たかがトンボ、されどトンボ」で、国際トンボ学会まであり、ドンボ博士たちがいるほどである。日本では196種、全世界では5,500種もいると言われている。石山では私はまだ1、2種しか見えていない。

◆私たちが見るトンボは成虫で、その幼虫はヤゴ。ヤゴは水の中で生きている。小さい頃よくヤゴを水の中の泥をすくって取ったり、トンボも虫取り網でたくさん捕っていたことを思い出す。捕ったトンボはほとんど死んでしまったが……。子どもの頃、トンボの尾を糸で縛り、飛ばせながら遠くへ行ってしまうないようにしていたこともあった。羽をもいだり、尾をもいだり…、そんな残酷なことをよくしていた。大人になってからは、罪責感もあってか、トンボを捕ることも近づくこともなくなったが、石山を観察するようになって、トンボの世界にあらためて興味を感じるようになった。



トンボの羽と飛び方

◆忙しく飛び交っているトンボたち。そのトンボはすべての生き物の中で最も飛行の名手だと言われている。蝶もトンボと同じように4枚の羽(前翅と後翅)を使って羽ばたいて飛ぶが、前翅も後翅も同時に上げ下げするので、からだ全体が上がったり下がったりする。ところが、トンボは前翅と後翅を互い違いに上げ下げできるので、真っ直ぐに飛べるし、またホバリングと言って、空中の同じところでじっと止まって飛び続けることができる。また、両方の翅を使って、高速度で逃げたり、獲物を追いかけてもできるという。ある本によれば、最高速度の記録はなんと時速 100km。宙返りもバックもできる。すべての動物の中で一番の飛行の名手なのである。



トンボの食べ物

◆トンボは幼虫の時も、成虫になってからも肉食である。幼虫のヤゴは水中の小さな生きものを食べ、成虫になるとカ、アブ、ハチ、コガネムシ類を食べるといふ。

◆トンボを捕った者ならわかるが、トンボにかじられると痛い。なにせトンボは肉食性だから噛み砕く歯があるからだ。



トンボの天敵

◆トンボの天敵は、鳥、カマキリ、クモ、他のトンボ、時には産卵中に水中からジャンプした魚やカエルなどである。

◆トンボの産卵は♂♀一対で、1回に約 3,000 個、そのうち幼虫になるのが 300 頭(トンボの数は匹ではなく、頭を使うらしい)。その 300 頭のうち成虫になれるのが 30 頭、そのうち産卵できる成虫はなんと1頭という確率だといふ。それは多くが天敵の餌になってしまうからだ。その残った1頭でもトンボは子孫を維持でき、絶滅することはないのだそうだ。

ただ、トンボが生息する環境を人間が破壊すれば問題は別である。絶滅を免れることはできなくなる。



トンボの住む環境

◆トンボは水のある場所がなければ子孫を維持することはできない。なぜなら、水の中に卵を産むからである。石山では、子どもの国に人工の池があるし、わずかに流れる沢らしきところがある。山が高くないので、水の流れも弱々しいが、いくつか水の貯まるところも各所にある。

◆水のあるところで羽化したトンボは、高い山の方へ飛んでいく。夏はほとんど山で過ごし、虫をたくさん捕らえてより成熟する。そして9月の中旬ごろから、平地へ移動しながらパートナーと出会い、連結して交尾をし、産卵へと向かう。そして晩秋には姿を消してしまう。もちろん、こうした往復移動をせずに一定の場所で生きるトンボたちもいる。

◆最近、私が石山の山中で目にするトンボの忙しい賑わいは、産卵の準備のため多くの虫を食べなければならないからなのだ、と納得。トンボの世界は深い。



2009.05/04 に撮影したエゾシマリス



